日本における模造ルルド発生考

― パリ外国宣教会の日本における再布教との関係から ―

A Study of the Birth of Lourdes Grottoes in Japan

― Through the Relation between its Birth and the Second Missionary Work by the Paris Foreign Missions Society in Japan ―

関根　浩子
Hiroko SEKINE

崇城大学芸術学部美術学科教授
Professor, Department of Fine Arts, Faculty of Art, Sojo University

キーワード：パリ外国宣教会、日本再布教、19世紀におけるマリア出現、メダイ、明治期、ルルド関係出版物、模造ルルド

Keywords：Paris Foreign Missions Society, The Second Missionary Work in Japan, The 19th -century Visions of the Virgin Mary, Medals of the Apparition, The Meiji-Period, The Publications about Lourdes, Lourdes Grottoes

Summary

The idea of building reproductions of sacred sites for those who cannot travel to distant places, visiting them and praying there as if they were original and receiving the same blessing, is common to the construction of substitutes of sacred places of the Holy Land in Europe and to "Fujizuka", reproductions of Mount Fuji or "Sazae-do" as substitutes for sacred places of Kannon, as well as to "Osunafumi" (stepping onto the sand collected from temples in Shikoku and in sacred places in "Saigoku [West Japan] ") in the Edo-period in Japan.

The same idea underlies the construction of Lourdes grottoes, which are replicas of the famous grotto in the Pyrenees. We can see such popular beliefs in Japan on the same level as those of Catholicism. Those beliefs are expressions of people's feelings and, if we refer to Lourdes grottoes, they are built all over the world, including Japan, to support the faith in the Virgin Mary.

Lourdes grottoes in Japan are constructed in many Catholic churches, convents and educational facilities. Those architectural works illustrate an important Christian popular belief. However, it has not been clarified how and why those grottoes were built, and their characteristics have not been studied in detail.

So in this paper I have explained as thoroughly as possible that Lourdes grottoes became necessary in the Meiji Era, if we take into account the conditions created by the second missionary work by the Paris Foreign Missions Society in Japan, the 19th-century visions of the Virgin Mary in Europe, the diffusion of medals of the apparition among believers, and of the publications about Lourdes in the same period. At the same time, I did my best to clarify, using fieldwork and historical documents, by whom, when, where, in what forms and under what circumstances the first Lourdes grottoes were built in Japan.

序

聖地は遠く誰もが参詣できるところではないため、その模造体を造り、そこに詣でて聖地に詣でたのと同じような気持ちで祈り、同じような恩恵を被ろうという発想は、欧州において代用エルサレム等が建造されたり、日本において江戸時代に模造富士山として「富士塚」が、また観音霊場の代用巡礼建築として「栄螺堂（さざえ）」が築造、建造されたり、四国や西国の巡礼地の砂を集めた「御砂踏み場」が設けられたりしたことなどと同じである。

ピレネーのルルドの洞窟を模した「模造ルルド」、ないしは「代用ルルド」が築造されたのも同じ発想に依っており、日本の民俗信仰とカトリックの生み出した民間信仰とは殆ど同じ水準で捉えることができる。そうした民間信仰は民衆の声そのものであり、模造ルルドに限っていえば、日本を含む世界各地に築造されて今も聖母信仰の拠り所となっている。

日本では、現在、こうした模造ルルド群は多くのカトリック系の教会や修道院、教育機関等に築造されて、キリスト教民間信仰のひとつの重要な実態を表す築造物にもなっている。しかし、最初期の模造ルルドが築造された経緯や理由、外観の特徴等を明らかにした論考は未だ見出されない。

そこで本稿では、明治期に模造ルルドが誕生した背景を、パリ外国宣教会の日本における再布教や、19世紀の西欧におけるマリア出現と日本人信徒から没収された出現に関係するメダイ、また、明治期におけるルルド関係出版物等から考察することで、その誕生が必然的なことであったことを可能な限り示してみたい。また併せて、最初期の模造ルルド群がどのような外観を呈していたのかを、現地踏査と資料等から可能な限り明らかにしたい。

1．パリ外国宣教会の日本再布教とキリシタン復活

1.1.　パリ外国宣教会とは

日本におけるキリスト教の宣教の歴史は、大きく２つの時期に分けられる。ザビエル渡来から禁教・鎖国に至るキリシタンの時代と言われる時期と、19世紀半ばの日本の開国によって宣教師の入国が可能となり、現在の日本カトリック教会に至る再布教時代の歴史である。本稿が扱うのは、言うまでもなく後者の宣教の時代である。

開国後、宣教師が再び日本の地を踏んだ時、日本はまさに幕末維新の激動期にあり、政治的、社会的、また対外的に国家存亡に関わる危機的状況にあった。そのような中で、日本カトリック教会の再建は、ローマ布教聖省の委託を受けて古くから極東宣教にあたっていたパリ外国宣教会がその役割を負うことになったが、そもそもパリ外国宣教会とはどのような組織なのであろうか。先ずは同会とその歴史について一言しておこう。

パリ外国宣教会（Sosiété des Missions Etrangères de Paris）は、1622年に教皇庁によって設置されたローマの布教聖省が1658年に宣教地へ代牧の派遣を決定したことを契機に創立された、教皇庁直轄の男子宣教会であり、パリ・ミッション会と通称され

る。同会は、1660年代初めに３人の代牧をアジア宣教へ派遣したが、布教聖省の指示でパリに彼らの代理人（プロクラトーレ）を置くと同時に、新しい宣教師の募集とその育成任務のために、1663～64年にパリのバック通り（Rue du Bac）128番地に土地を購入して外国宣教神学校（現在の総本部）を開設した。そして同年８月には教皇アレクサンデル７世によって史上初の宣教会として公認された。

パリ外国宣教会は、スペインやポルトガルの保護権のもとに当時宣教地で活動した各修道会とは異なり、フランスの教区司祭らによって組織されていた。そして司教と司祭はローマの布教聖省の直接指示下に派遣され、1659年の「外国宣教に関する指針（インストルクティオーネス）」に従って、インドから日本に至る広い宣教地のそれぞれの国の風習を尊重し、それらに順応することを重視しながら、現地人教区司祭養成に始まるアジア諸国の教会形成に努めた。

1700年には会の会則が初めて成文化され、基本方針が①地域社会の司教と司祭の養成、②新信徒の司牧、③非キリスト教徒への福音宣教、④誠実な愛と尊敬をもって教皇に忠実に従うこと、の４項目にまとめられ、これらは1968年の総会まで変わることはなかった。同会は17世紀末より1815年まで諸々の要因によって危機に陥ったが、財政再建によって宣教活動計画や召命への呼びかけなどが著しく盛んになり、宣教師の派遣数も、1660年から1815年までは269名であったのに対し、1815年から1970年にかけては3,875名を数えるまでになっていた。19世紀に入ってからは、宣教先が日本や朝鮮半島、満州、マレーシア、チベット、中国の海南島、広東省、ビルマへと拡大され、さらに司祭養成という最大の目的達成のために、1845年には19もの大小の神学校が運営されるまでになっていた(1)。

1.2.　パリ外国宣教会による日本再宣教の試みと信徒発見、並びにその後の発展

スペインとポルトガルが掌握していた布教の主導権を取り戻すために教皇庁が設置したローマの布教聖省がパリ外国宣教会に日本教会を委任したのは、天保２（1831）年であったが、彼らの当初の入国の試みはキリシタン禁制のために実らなかった。しかし、弘化元（1844）年にヴェルサイユ出身の T. A. フォルカード（Théodore-Augustin Forcade, 1816-85）は琉球国那覇に上陸を試みて成功し、再布教を目指す先駆者となった。フォルカードは自由行動を許されず、監視下に置かれながらも、弘化３（1846）年３月に初代日本代牧に任命された。同神父は後年、療養のためにフランスに戻り、後にヌヴェール司教（在任：1861-73）になった際、ルルドにおける聖母の出現相手であった少女ベルナデットに修道生活を勧め、ヌヴェール愛徳会への入会を図った人物であり、1885年に68歳で逝去するまで、一日として日本を忘れず、日本のために祈りと犠牲を捧げたとされる(2)。

琉球に渡来した他のパリ外国宣教会員たちも同様に日本の役人から冷遇されたが、フランス外交官の通訳として入国する作戦を立て、安政３（1856）年、L. T. フュレ（Louis-Théodor Furet, 1816-1900）と P. ムニクー（Pierre Mounicou, 1825-71）が宣教師としては初めて本土の函館に入り、しばら

く同地に滞在した。続いて安政５（1858）年９月には　P. S. B. ジラール（Prudence-Séraphim-Barthélemy Girard, 1821-67）が江戸に入り、同年10月に日本代牧に任命された。ジラールの指導下、1859年に函館でE. E. メルメ・ド・カション（Eugène Emmanuel Mermer de Cachon, 1828-71）が、また1860年には横浜でムニクーらがそれぞれ福音宣教を開始し、さらに文久２（1862）年には横浜で最初の天主堂の献堂式が執り行われた。次いで文久３（1863）年にはフュレとB. T. プティジャン（Bernard Thadée Petitjean, 1829-84）が長崎を新拠点とすることになり、元治２（1865）年２月に大浦天主堂の落成式が邦人信徒不在のまま挙行された。同聖堂においてプティジャン神父が歴史的な信徒発見を行い、教会復活が確認されたのは、その一ヶ月後の３月17日のことであった。日本に到着することなく中国で病死したC. E. コラン（Charles-Emile Colin, 1812-54）の後任として、第３代日本代牧に任命されたプティジャン（1866年に香港で司教叙階）は、キリシタンの用語を用いて要理書の出版を始め、後には横浜のジラールの方針に従って漢語を用いながら、明治６（1873）年の切支丹高札撤去までに21種類の教書類を刊行している。また彼は、明治元（1868）年からの浦上キリシタン流配事件に際しては極秘裏に10名の神学生をピナン総合大神学院へ避難させ、明治３（1870）年にも同様に神学生13名を香港へ送り出した。

行動に制限はあったものの、宣教師たちはその後主要な港町から次第に地方へ足を延ばすようになり、アイヌの村や東北、北関東、関西、中国・四国地方などへ「歩く宣教師」として巡回して説教を行った。男女の伝道師（カテキスタ）も増え、さらに会の要請に応えて1870年代にはサン・モール修道会やショファイユの幼きイエズス修道会などの会員が来日して、福祉と教育の分野で同会に協力した。日本教会は1876年に北緯聖会（代牧P. M. オズーフ（Pièrre-Marie Osouf, 1829-1906）と南緯聖会（代牧プティジャン）の２つの代牧区に分かれ、1882年には同会の第一目的であった邦人教区司祭が誕生した。1884年10月にプティジャン司教が死去した後は、J. A. クーザン（Jules Alphonse Cousin, 1842-1911）が後任に任命され、1888年３月に日本中部代牧区が創立されるに及び、F. N. J. ミドン（Félix-Nicolas-Joseph Midon, 1840-93）が大阪に移った。続いて1889年２月にようやく信教の自由が保障され、翌年の３月には長崎で最初の日本教会会議も開催された。さらに1891年６月には、教皇レオ13世が日本教会に確立させた聖職者の位階制度（ヒエラルキア）によって、新しく函館、東京、大阪、長崎の４教区が成立し、それぞれA. ベルリオーズ（Alexandre Berlioz, 1852-1929）、オズーフ、ミドン、クーザンが教区長となり、本格的な司牧、宣教活動が開始された。

日本教会の組織はこのようにして次第に強化され、パリ外国宣教会だけの運営から他修道会・宣教会も加わった多様性に満ちた宣教へと発展することになった。例えば札幌知牧区はフランシスコ会（1915年）、名古屋知牧区は神言修道会（1922年）、鹿児島知牧区がフランシスコ会（1927年）、宮崎・大分２県はサレジオ会（1928年）に移任された。特に1927年に長崎教区が独立

し、邦人の新教区長が最初の邦人司教となったことは、地域教会の自立という同会の目的達成に向けて著しい一歩が踏み出されたことを意味していた。

2　19世紀のフランスにおけるマリア出現と東京国立博物館保管のマリア出現関係メダイ群

１章では日本におけるキリスト教の再布教がパリ外国宣教会の宣教師らによって行われたことを概観したので、続いて東京国立博物館に保管されている、信徒からの没収品であり、19世紀のフランスにおけるマリア出現にも関係しているメダイ群と、パリ外国宣教会の宣教師との関係について見ていきたい。

2.1.　19世紀におけるマリアの出現

カトリック世界には、民衆や聖職者などのある人物に聖母マリアが出現し、民衆や教会へのメッセージや時代の予言を伝える「聖母の出現群」（cycle marial）と呼ばれる一群の出来事がある。それらは多くの場合、自然現象の異変や病の治癒という奇跡を伴ってその地に対する信徒の信仰を集め、やがてはそこに礼拝堂や聖堂を建設させるに至る。そしてそれによってその地は巡礼の目的地となり、信徒にとっての聖地となっていく。

このような聖母マリアの出現は、すでに５世紀頃から度々報告されているが、時代によってその頻度は異なっている。19、20世紀の両世紀は、「イエスの聖心」と並んでピウス９世よる聖母の「無原罪の御宿り」に関する大勅書（1854年12月８日発布）[3]によって教義的裏付けを与えられた聖母マリアへの信仰が、修道会における実践や聖地巡礼という実践において活況を呈したため、聖母出現の頻度が高かった世紀であった。しかし、1830年から1967年までの間に各地の司教区調査委員会の検討に委ねられた187の出現のうち、教皇庁から聖母マリアの巡礼地としての資格を得たのは11件にすぎない[4]。また、20世紀に入ってから報告された出現のうち公式認可されたのは、わずかにポルトガルのファティマとベルギーのバヌーの２件にすぎない[5]。

聖母マリアは、ルルド以前にすでにパリ（1830年）やフランス南東グルノーブル司教区の農村ラ・サレット（1846年）などに出現していたが、パリにおける前者のご出現とは、聖母マリアご出現の嚆矢となったパリ７区バック街の愛徳姉妹会におけるカトリーヌ・ラブレー（Catherine Labouré, 1806-76）への1830年におけるご出現のことである。出現した聖母は、この修道女に、以下の２節でも言及するメダル鋳造を託し、裏と表に彫るべき図柄を視覚化して伝えたという。そしてその２年後にパリ大司教に認可されたメダルが頒布されると、奇跡と回心のメダルとして評判となった。なかでも1842年にユダヤ教徒ラティスボンヌにメダルの聖母が出現し、彼を回心に至らしめたローマでの出来事は有名で、教皇庁公認の11件のマリア出現のうち２番目の事例となった。カトリーヌの聖母体験は、メダルの鋳造頒布活動と幼きマリアの会の諸活動を通じて、マリア信仰の各階層への浸透と広範な普及を準備した点で、19世紀のマリ

ア崇敬史の新展開において大きな役割を演じた。

ラ・サレットでは、1846年９月19日に、山中で牛の番をしていた15歳のメラニー・マシュー・カルヴァ（Mélanie Mathieu-Calvat, 1831-1904）と11歳のマクシマン・ジロー（Maximin Giraud, 1835-75）に美しい聖なる女性が現れ、人々には、主日や教会の掟、祈りの軽視などを悔い改めなければ彼女の息子が手を下すままにするほかないと泣きながらメッセージを残し、メラニーとマクシマンには、祈りの勧めと秘儀の教示を行ったという。そして数日後に同地に湧き始めた泉の水による奇跡的な治癒例が報告されるようになっていくが、同地での聖母の出現は来るべき大飢饉を警告するものであった。

以上２件の聖母のご出現に続くのが、既述のルルドにおける少女ベルナデット・スビルー（Bernadette Soubirous, 1844-79）へのご出現（1858年）[(6)]であり、さらにクロアチアのイラカ（1865-67年）やチェコのフィリップスドルフ（1866年）、フランスのポンマン（1871年）、アイルランドのクノック（1879年）、ポルトガルのファティマ（1917年）、ベルギーのボーラン（1932-33年）、ベルギーのバヌー（1933年）におけるご出現が続く。ラ・サレット以降の９件の出現体験者はいずれも民衆レベルの非聖職者であり、なかでもラ・サレット、ルルド、ポンマン、ファティマ、ボーラン、バヌーでは聖母マリアは15歳以下の子供に出現していた。

2. 2.　東京国立博物館保管のルルドのメダイを含むマリア出現関係メダイ群

ところで、東京国立博物館には、明治12（1879）年に内務省社寺局から同じ内務省の博物局所属であった博物館に引き取られた、旧長崎県保管の信徒からの没収品を主とする「キリシタン関係遺品」が保管されている。その種類は、絵画や彫像、十字架、ロザリオ、ロザリオ金具、銅牌、メダイのほか、祈祷書や守裂、遺物函、巾着、貨幣といった参考資料にわたっているが、本節ではそれらのうち「メダイ」に着目して、ルルドを含む19世紀のフランスにおけるマリア出現との関係を見てみよう。

東京国立博物館のキリシタン関係遺品のうち、長崎関係のものには、①フランシスコ・ザビエルの鹿児島における布教の開始（1549年頃）から家康がキリシタン禁令を発する1612年頃までの時代に、海外から齎らされたか、それを模して国内で製作され、禁教令以後没収されて奉行所の宗門関係倉庫に格納された「もと長崎奉行所宗門蔵保管」のものと、②浦上三番崩れ時の没収品で「安政三年長崎奉行所に収納」されたもの、③浦上四番崩れに関係する遺品で「慶応三年長崎浦上村切支丹より収納」されたもの、さらに④収納年が不詳の「長崎浦上にて収納」されたものがある。以上は来歴がわかる収納品で、同館から平成13年に発行された増補改訂版の『東京国立博物館図版目録　キリシタン関係遺品篇』では、それらは「長崎奉行所旧蔵品（奉行所保管）」か「長崎奉行所旧蔵品（宗門蔵保管）」と明記されている。増補改訂版ではさらに、同館に⑤出所来歴が記されていない収納品も相当数あることが示唆されると

ともに[7]、前者の４つのグループと区別するために、それらに「明治12年12月内務省社寺局より引き継ぎ」という記載を施したことが凡例に記されている。

東京国立博物館が保管する没収品のメダイ群は、当然これらのうちのいずれかに属しているが、19世紀におけるマリア出現と関わりのあるメダイが①のグループに属さないことは明らかであるので、それは②から⑤までのいずれかのグループに属すということになる。また、同図版目録に掲載されている74点（図版番号381～454）のメダイのうち、最初の17点（図版番号381～397）は16世紀後半から17世紀初期にヨーロッパで製造されたものであるため、本節における考察の対象外となる。従って19世紀にヨーロッパか外国で製造された図版番号398から454までの57点が考察対象となり、来歴（明治44年個人寄贈）が判っている図版番号425以外は、⑤の内務省社寺局から引き継いだ来歴不詳のグループに属すということになる。

江口正一氏は、初版の『東京国立博物館図版目録　キリシタン関係遺品篇』所載の「東京国立博物館保管の「キリシタン関係遺品」について」と題した解説の中で、パリ外国宣教会の「神父たちは十字架・メダイ・ロザリオなどを布教のために多量に海外から携行してきており、浦上の信徒にもそれらを与えたものと思われ、それが四番崩れの没収品のなかに多く見られるのである。…略…」[8]と述べ、浦上四番崩れ時の没収品の一部が開国前後にパリ外国宣教会の宣教師たちが携行してきたメダイ群であった可能性を指摘している。しかし、出所不詳の19世紀の56点のメダイ群については、図版や作品目録中にデータが記載されているにも拘らず、同解説中ではそれらに関する言及や分類は一切なされていない。とはいえ、56点のメダイ群の表と裏に浮彫りされた図像や作品目録中のデータを観察、分析すると、片面に「無原罪の聖母像」が浮彫りされたものが圧倒的に多く、さらに、それらのうち28点の聖母像は、大部分が「長崎奉行所旧蔵品（宗門蔵保管）」と記載されている16世紀後半から17世紀初期のメダイ群のうちの幾つかに浮彫りされた「無原罪の聖母像」とは図像的な特徴が明らかに異なっているのに気付く。すなわち後者の古いグループの聖母像は、全身を太陽の光に囲繞され、足下に月を踏み、頭に12の星の冠を戴く「黙示録の女」として表現されているが、前者の聖母像は19世紀のフランスにおけるマリア出現のひとつと関係する「光の聖母像」ないしは「不思議のメダイ」の聖母像（図１）として表現されているのである。しかし、それ以上に本稿との関連で注目されるのは、「光の聖母像」に比べて数は少ないものの、同じフランスにおけるその他のマリア出現の場面を浮彫りで表現したメダイ群、すなわちラ・サレットに出現した聖母マリアを表に、そしてその巡礼聖堂ないしは文字を裏に浮彫りしている「和解の聖母像」（Ｃ935、Ｃ937）のメダイ２点（図２，３）と、ルルドに出現したマリアを浮彫りで表現している「ルルドの聖母とベルナデット像」（Ｃ953）のメダイ１点（図４）が存在していることである。

出所来歴は詳らかでないものの、明治12

年より前からパリやラ・サレット、とりわけルルドで生じた聖母のご出現に関係するメダイが日本に存在していたことは、ルルドの聖母やそこで生じた奇跡的な治癒が当時の日本人信徒の既に知るところであり、またそれらを信徒に与えたのがパリ外国宣教会の宣教師であったことを示唆しているように思われる。

2.3. 宣教師たちの携行品の信徒への付与の根拠

ところで、江口氏は、上述のように、パリ外国宣教会の神父たちがメダイやロザリオなどを布教用に海外から携行してきていて、浦上の信徒にもそれらを分け与えたと指摘していたが、その根拠については示していない。そこで本節では、調査・研究を進める中で見出した携行品分配の事実に関する根拠を幾例か示して、江口氏の指摘を補強したい。それらは主に F. マルナス（Francisque Marnas）の著書『日本キリスト教復活史』（*La "religion de Jésus" (Iaso Jakyo) ressuscitée au Japon dans la seconda moitié du XIXe siècle*）(9)中に確認される。

まず、信徒たちが聖具や聖画等の美術品を所持していたと考えられる根拠から挙げれば、第１章の1865年の記述中に、「…苦難の時代を経て彼らの時代まで守られてきたいくつかの聖具や先祖の聖遺物を秘かに宣教師に見せることができるのを嬉しく思うのだった。時には…略…ロザリオのいくつかの珠にすぎないこともあった。またある時は、古い版画のこともあった。当時プティジャン神父はこう書いている。「我々は高さ三尺・幅二尺の聖母を描いた図をゆっくりと見る機会があった。これは聖処女マリアで、雲に乗っており、下方右にはアッシジの聖フランシスコが、左にはパドゥの聖アントニウスが聖児イエスを抱いているのだった。聖女クララと他の二人の聖人も図の下に描かれている。これを手に入れることができるなら、この所有者が望むどんな物でも我々は与えるのだが…」とある。さらに続けてマルナスは、「プティジャンは手紙のなかで他の若干の相当すぐれた物について語っている。それは銅製の美しい十字架、＜掌の大きさで完全な作り＞の鉄製のキリスト像、および十字架上の我が主イエス・キリストを描き下方に聖母マリアと聖ヨハネとを配してあるメダイユであった。方々の村で、切支丹はこのほかにもいくつかの珍しい十字架や図をもっており、それらの前で彼らは集まって祈りをし、…略…」とも書いている。また、プティジャン神父は、同年の６月９日から10日にかけての夜、２人の帳方に罪と悔悛について語った後、２人からロザリオと鞭を求められたことに非常に驚いたという(10)。

続いて、同年の９月13日から14日にかけて出津の村に出かけたプティジャン神父は、宿の提供を受けた信徒宅で聖画を見せられた際、「それにはロザリオの十五の玄義とともに、下の方にはアッシジの聖フランシスコ、パドゥの聖アントワンヌ、私には名の分らないもう一人の聖人が描かれていました。この村や付近の人々が時々やってきてこの絵を拝みますが、彼らはこれを彼らの神父からもらったものと信じています。おそらくその通りでしょう。私は我々の先輩である聖人のこの貴い遺品の下で、私の

もってきた聖具を信者たちに分配しました。…略…（傍点は稿者による）」[11]と述べている。つまり彼は、宣教師である自分自身が信徒に聖画や聖具を与えたと証言しているのである。

その他、マルナスの著書からは、同年の12月における信徒ドミニコ松五郎からプティジャン神父への聖画並びにロザリオ２個の譲渡の要望[12]や、1866年における信徒仙右衛門から同神父への祖母用のロザリオの譲渡の要望[13]、さらに同じ1866年内のプティジャン神父から五島の漁夫へのメダイユの譲渡[14]といった事実があったことを確認することができる。

以上の事実から、根拠は示していないものの、江口氏の推測は妥当なものであったと結論づけられるように思われる。

３．日本における模造ルルド誕生前後のルルドに関する出版物

１、２章の概観や考察によってパリ外国宣教会の日本再布教とルルドとの関係は多少とも確実になったが、さらに今度は出版物を通してのルルドの紹介や普及活動を見てみよう。

ルルドの洞窟やその奇跡に関する出版物は、ベルナデットに聖母の御出現があった1858年の11年後に、ジャーナリスト H. ラセール（Henri Lasserre, 1828-1900）の著書『ルルドの聖母』（*Notre-Dame de Lourdes*）がパリで刊行されて以来、現在に至るまで、フランスを中心とする各地で発行され続けており[15]、日本でも最近では数多くの出版物が刊行されているが、本章では日本における模造ルルドの発生前後における出版物に限って見ていく。

ルルドにおける聖母マリアの出現やその後に生じた夥しい数の奇跡的治癒例は、日本においては、管見の限り、既述のラセールの著書の邦訳書によって初めて紹介された。『留ゝ登゛の姫君』と題されたこの訳書は、歴史家の水主増吉による英語版からの重訳であり、大分県の天主公教会から明治25（1892）年８月に発刊された。総頁数が481頁にも及ぶ同書では、31回にわたってルルドの地勢やベルナデットを含むスビルー家のこと、貴婦人の出現、ベルナデットへの諸尋問、泉水湧出、泉水による病者の治癒、名を明かす貴婦人、泉水の分析、聖堂の建築のことなどが詳細に記されている。同書中で興味深いのは、第29回の「著者ヘンリ、ラッセル氏の受けたる治療の事」[16]と題された章の記述である。ここには、友人の勧めに従って取寄せたルルドの泉水で両眼を拭ったことで、医師によって不治の病と診断された視力の低下からわずか数分にして治癒したという、著者ラセール自身のルルドの聖水による奇跡の体験が語られている。その他、最後の「附録」[17]では、年月を経るに従ってルルドの姫君に対する信仰と尊敬がヨーロッパ各国やアメリカ、中央アフリカ、オセアニア諸島といった殆ど全世界に及び、ルルドの聖母について語り彼女を記念するために祭壇を建ててその肖像を飾ったことで、ルルドの地だけでなく、遠国各地においてもルルドの聖母の効能が見られたとされ、その例としてベルギーのオオスタッカーの模造ルルドで起きた奇跡の治癒と、眼病で右眼を失っ

たコンスタンティノープルの回教徒の治癒が紹介されている。

ラセールの著書の邦訳に続くルルド関係の刊行物は、明治44（1911）年まで下らなければならない。それはパリ外国宣教会士で、新潟や佐渡、仙台、松本、甲府等で布教に当たった L. ドルアール・ド・レゼ（Lucien Drouart de Lezey, 1849-1930）神父が著した『ルゝドの洞窟』で、和佛協会印刷部がその初版を印刷し、東京の関口教会の伝教士であった林壽太郎によって出版されたものである[18]。同書は、第１章「出現の話」、第２章「病気の平癒」、第３章「ルゝドの参詣」、第４章「ルゝド出現の理由」の４章から成る総頁数37頁の小著であり、ルルドでベルナデットに起こった聖母のご出現に関わる一連の事柄や治癒例の記述は簡略である。しかし本書は、第３章において、模造ルルドが造られている理由や、世界や日本における洞窟模型の建造例を列挙している点で本稿にとって重要であるといえる。レゼは模造ルルドが造られている理由を、「聖母マリアはベルナデツタに對して、多くの人々が此所に來ることを望むと仰せられたが、然しルゝドの洞窟に實際往かれるものは世界に少い、希望しても往れないもの概ね然りだ、此故に築山とか巖石などを以て洞窟に摸形たものを造つて、其處にルゝドの聖母の御像を安置し、或はルゝドの湧泉の水を取寄せてルゝドの泉に往つた積りで聖母の御守護を願ひつゝ之を飲むといふやうなことをする、斯く願へばルゝドまで往かずしてルゝドに参詣したと同様な御守護を受ける、例へば前章に挙げたペトロドルデルの平癒はルゝドに往つたのではなく、白耳義國のオースタツケル市に出來て居るルゝドの摸造なる洞窟に往つて癒つたのである…略…」[19]と述べている。彼によれば、このようにして世界各国にルルドの洞窟と呼ぶ模型ができ、欧米やアジア、アフリカなどでローマ・カトリックを奉じる国には模造ルルドのない国はなくなったのである。しかし、模型の多くは幾分オリジナル（図５）に似ているというにすぎないものであり、ルルドの洞窟と同一形状同一寸尺に作ることは困難と費用を要するために極めて少ないとも述べている。そして、模型が造られている国や都市として、上述のオースタッカーやヴァティカン宮殿の庭、ナポリ、パリ、スイスのフリブール、スペインのサラゴサとマドリード、その他、アイルランドやドイツ、オーストリア、ベルギー、合衆国、カナダ、ブラジルなどを挙げ、最後に日本における現状について語っている。レゼは、日本ではルルドの聖母の御像は多くの教会に安置されているものの、洞窟模型まである所は極めて少ないとし、存在する所として長崎の五島の玉之浦[20]と広島の福山、尾張の名古屋を挙げている。しかし、フランスの洞窟と完全に同一の模型はないため、東京の小石川区関口台にある玫瑰塾の後庭の広地に純粋な模型を造ることになり、マッサビエルの洞窟と同一の形状・寸尺にするためにルルドの主任司祭に依頼して図面と模型まで取寄せ、技師に依頼して設計させたと述べている。さらに高さや奥行き、横幅、細部に至るまで原形通りであるため時日を要したことや、岩石の内部は鉄骨で組まれ、外部はコンクリートで固められているため

堅固な上に原形に似せ易かったこと、また岩石の色彩や聖母マリアが出現した小窟の位置が原形と完全に同一であり、御像の丈（５尺有余寸）もベルナデットが語った通りであること、さらに聖母の御足の許には薔薇が植えられ、ルルドから聖水も取寄せて置かれていることなども記されている。

その他、レゼの著作にわずかに先行する1908年に初版が刊行され、デーシアンの著作もしくは口述を林壽太郎が訳したと考えられる『不思議』と題された書物も存在している[21]。同書は、『ルゝドの洞窟』と同様、和佛協会印刷部が印刷して、林壽太郎が東京で出版したものであり、内容的には、足に深傷を負った樵夫がルルドを模した洞窟を巡礼し祈りを捧げた後、奇跡的な治癒を見せ、それについて医学界や科学界などで事実として認められたというベルギーにおける事例紹介となっているというが[22]、同事例はレゼの著作中にもペトロドルデルの平癒として紹介されているため、ここでは割愛する。

４．日本における最初期の模造ルルド群

ルルドに関する上掲の明治期の複数の出版物にすでに指摘されているように、19世紀末から20世紀初頭にかけて、ルルドの泉と洞窟の模造施設は世界各地に築造されて聖母信仰の拠り所となっていくが、日本の最初期の模造ルルドは、いつ頃、どこに、誰によって造られ、どのような外観を呈していたのであろうか。以下では、築造された模造ルルド群を資料や現地踏査をもとに時系列で概観していこう。

①　カトリック井持浦教会の模造ルルド（明治32年築造）

日本で最初に模造ルルドが造られたのは、当時の長崎教区に属していた、上掲の下五島玉之浦の井持浦教会（図６）の敷地内においてであった。1873年にキリシタン禁制が解かれると、五島でも各地に聖堂が建てられ、宣教師も派遣されるようになったが、P. T. フレノー（Pierre-Théodore Fraineau, 1847-1911）神父（全五島1877-81年在任）、J. F. マルマン（Joseph-Ferdinand Marmand, 1849-1912）神父（全五島1877-80年、下五島1880-87年在任）に次いで全五島の司牧宣教を委ねられたのは A. ペルー（Albert Pelu）神父（1888-1918年在任）で、ローマのヴァティカン宮殿の庭に模造ルルドが造られたことを伝え聞き、五島にもルルドの洞窟をと、築造を計画したのはこのペルー神父であった。玉之浦のような辺鄙な場所にルルドが造られたのは、ひとつには、明治28（1895）年に最初の木造の聖堂を建設しようとして地開きをした際に清水が湧き出て、それが当時のフランスにおけるルルド信心と合致していたためであり、いまひとつには、井持浦の近くの大宝村にある古い大宝寺に全五島から船を仕立てて来ていた参詣者を目にしていた信徒たちが、自分たちも井持浦にそのような巡礼地をもちたいと願ったためであった[23]。こうしてペルー神父は築造場所を井持浦天主堂の脇に定め、着工に際しては全五島の信徒に協力を呼びかけて五島の津々浦々から小舟で材料の美石を運ばせ、それらを信徒の代表た

ちの奉仕によって積み上げさせた。洞窟の設計には、海外旅行のまれな時代にフランスのルルド参りを実現した五島の住人で、姓を倉重といった島民の意向が反映されているという[24]。さらに、洞窟には故国フランスから贈られた鉄製のルルドの聖母像が収められ、洞窟横の泉水には本場のルルドの奇跡の泉から取寄せた霊水も注がれた。この模造ルルド（図７）は明治32（1899）年に完成され、大勢の信徒が参列する中、クーザン司教によって祝別された[25]。

パリ外国宣教会の長崎地区の担当者は、この祝別式の様子を、「1899年４月のある日、この列島の人々は真珠の湾、玉の浦へ喜びにあふれて、どっと漕ぎ出した。４年前から「どうみてもマッサビエルの洞窟を思わせる」地形の所に、ルルドの聖母の教会が出来ている。ペル師と彼の教区民たちはこれをもっと似せたいと思っていたがこの孝愛の溢れである夢を見事に実現させたのである。彼らは洞窟を作り、御像を置き、泉をつくった。それで、この列島の共同体の奉納者の祝別の為に一番遠い村々からさえも信者たちが集まって来たのである。地区の司祭たちも司教を囲んでそこに来ていた。司教は素晴らしい教皇ミサが済んでから、静に跪いて群衆の真ん中で洞窟の荘厳な祝別を行った。そのあと、この忘れ難い祝いの日は一日中、まことに無原罪の聖母を賛えての賛美の大合唱となった。…略…」[26]と、年次報告中に記している。さらに同担当者は、翌年の年次報告では、医者から見放された30歳位の玉之浦の婦人の身にルルドの水が齎した奇跡や、その喜びによる彼女の家族の霊的再生について述べ、「私は人々の霊魂を再生させるために、聖母が玉の浦（Tamanoura）の洞窟を造る考えを起こさせて下さったのだと、ますます希望をかけている。そこへの道は、巡礼者たちがもう知り始めている。」[27]と報告している。井持浦聖堂横の洞窟で起こったこの奇跡的治癒例は、この他、カトリックの司祭であった故中田武次郎神父の自伝的著作『キリシタンのルーツ－最後の殉教者とその一族－』中でも紹介されている[28]。

井持浦教会の模造ルルドは今も敷地内に現存しており、その形状はご出現があった小窟と聖水が湧き出た洞窟を再現しようとしていたことを窺わせてくれるが、規模はオリジナルよりかなり小さい。しかし、マッサビエルの洞窟と同様にベルナデット像は置かれておらず、マリアの御像だけがご出現の場所に見立てた小窟に置かれている。

②　カトリック福山教会の模造ルルド（明治41年築造）

現在、福山のカトリック教会には模造ルルドは現存していないが[29]、４教区時代は大阪司教区に属していた福山にも、かつて模造ルルドが存在していたことは、パリ外国宣教会の明治41（1908）年の年次報告書の記述によって確認できる。同報告書の福山地区の担当者は、異教徒たちを照らすための光ともっと多くの信徒が速やかに獲得され、また、ルルドの汚れなき御宿りの聖母への自身の信心が証しされるようにと、パリ外国宣教会の E. ロラン（Enile Roland, 1898-1911在任）神父が洞窟を建てて聖母マリアの御像を置いたこと、そしてそれが

異教徒たちの目を引いてしばしば彼らにカトリックの聖なる教えの奥義を語る機会を宣教師に与えていると記しているからである[30]。従って、福山にもかつてはロラン神父によって模造ルルドが築造されていたことは疑いない。ベルナデット像については言及されていないため、設置されていたのは聖母マリア像だけであったと考えられるが、全体的な外観を明らかにしてくれる資料は、残念ながら見出されていない。

③　カトリック主税町教会の模造ルルド（明治42年築造）

４教区時代は東京教区に属していた名古屋地区に、明治20（1887）年にパリ外国宣教会の A. E. テュルパン（Augustin Ernest Tulpin, 1853-1933）神父によって設立されてから、大正11（1922）年に神言会、続いて昭和27（1952)年に最終的に名古屋教区に委譲されて現在に至る主税町教会（図８）の敷地の南東隅にも、富士山の溶岩を使って築造された明治期の模造ルルド（図10）が現存している。この洞窟模型は、明治40（1907）年に主税町教会の主任司祭に就任したパリ外国宣教会の C. P. フェラン（Claudius Philippe Ferrand, 1868-1930）神父（図９）が明治42年に築造したものであり、同年２月10日に P. X. ミュガビュール（Pierre-Xavier Mugabure, 1850-1910）大司教がこれを祝別している。

パリ外国宣教会の明治42（1909）年の年次報告がフェラン神父が語ったこととして記している以下の報告からは、その築造理由や築造後に同模型が及ぼした影響について窺い知ることができる。同報告は、「名古屋地区にとって、この一年の最も目立った事柄は、何と言っても宣教会の庭にルルドの美しい洞窟ができ、司教閣下が昨年の２月11日にご自分の手で祝福して下さったことであった。次のような奇跡が、私に洞窟を作ろうという考えを抱かせたのである。不随でひどく苦しんでいる老女エリザベット加藤りんは、３か月前から寝込んでいて、その粗末な床から出ることができない。彼女は９月１日にルルドの聖母への九日間の祈りを始めた。毎日奇跡の洞窟の水を少しずつ飲んでいた。９月８日、聖母ご誕生の祝日の朝６時、私は彼女にご聖体を持って行こうと支度をしていた。毎週二度、そうしていたのである。ところが驚いたことに、彼女が聖堂に入って来るのがみえたのである。彼女は治っていて、家から教会までの25分もかかる道を歩いて来ることが出来たのだった。無原罪の聖母は他にも貴重な恵みをかち得て下さった。洞窟の建立が多くの異教徒に強い印象を与え、一般の人々にも、ルルドのご出現の美しい出来事が知られるようになったことなどの他に、私は数人の迷える羊が檻に戻って来るという慰めを得た。…略…。神は、私の小教区で一番良い信者、ベルナルド大池政五郎を取り上げる事を善しとされた。この青年は名古屋の信者たちが公然と「聖人」と呼んでいた人で、…略…、毎日朝５時半頃には聖堂へ来て、真の観想に耽って二時間をすごすのだった。それから洞窟の前に行ってロザリオを唱えた。私は彼が雪の中に跪き、恍惚とした様子でルルドの聖母の美しい御像にじっと目をやっているのを度々見たことがある。…略…つい最近も、私は死に瀕した

異教徒の枕元に呼ばれた。…略…彼に洗礼を授け、それから再び健康が与えられるようルルドの聖母に懇願するようにと勧めて、彼に洞窟の水を飲ませた。ところが数滴飲み込むや、その顔の様子が変わり、呼吸も正常に戻って、３週間この方なかった食欲が出て来たのだ。現在は順調に回復しつつある。…略…」[31]と伝えている。

以上の報告からは、築造動機がルルドの聖母への祈りと洞窟の水によって不随の老女[32]に齎された奇跡であったことが分かるが、さらに『素顔の名古屋教区』からは、その奇跡がちょうどルルドにおける聖母出現の五十周年記念の年に当たっていたからでもあったことが分かる[33]。また、洞窟の築造によってルルドの聖母の御出現が広く知られるようになったことや、ルルドの聖母像が信徒の信仰の拠り所となったこと、さらには洞窟の水が死期が迫った異教徒にすら奇跡を齎したことなども理解される。

主税町教会の模造ルルドも、井持浦教会のそれと同様に、聖母のご出現の小窟と清水が湧き出た洞窟に当たる大窟が造られているが、規模はやはり小さい。そしてご出現の場所に当たる小窟には、浜松教会の御像との酷似からフェラン神父が用意したと推測される、頭部に冠を戴く、築山全体との比率から言えばかなり大きな聖母像が置かれている。出現したマリアを見上げて祈るベルナデット像は置かれていない。

④　カトリック浜松教会の模造ルルド（明治42年築造）

明治期には東京教区に属していた静岡の浜松教会に、模造ルルドが築造されたか否かについては、パリ外国宣教会の明治43（1910）年の年次報告中に、「外岡師が司牧している藤枝と浜松の共同体は特別に熱心であった。浜松では、寛大なフェラン師からルルドの洞窟を小型にした美しいものと、聖堂の御像とが信者たちの信心のために寄贈された。彼らは大喜びで、自分たちの天の母の御足もとへ祈りに来る。」[34]とあるため、他の地区の教会の敷地内に築造されたような規模ではなかったにしろ、名古屋地区担当のフェラン師が寄贈した小型の模造ルルドが存在していたことは疑いない。しかし、『素顔の名古屋教区』には、浜松教会のルルドは名古屋の主税町教会のそれと同年の明治42（1909）年10月25日に祝別されたと記されているため[35]、築造年は明治43年ではなく、42年であったと推測される。

いずれにせよ現在の浜松教会の敷地内にある洞窟部がひとつしかない模造ルルド（図11）は、明治期に築造されたものではなく、13ないしは14年前、すなわち平成に築造されたものである。教会の場所自体が、明治12（1879）年の創設時の場所から20年前に現在の冨塚町に移転されている上、教会堂自体も７度も建て替えられているため、初代の模造ルルドが現存していないのも無理はない。しかし、真新しい彩色を施されて現在洞窟内に置かれている、主税町教会の聖母マリア像に酷似した御像は、伝承では、廃棄されかかった時に信徒のひとりが譲り受けて守ってきた、フェラン神父寄贈の明治期のマリア像である[36]。

築造当初の模造ルルドの形状を明らかにしてくれる史料は見出されていないが、聖

像については、聖母像を守ってきた信徒がベルナデット像を所持していなかったことを考慮に入れるならば、他の初期の模造ルルド同様、最初から聖母像だけが置かれていたと考えるのが妥当であろう。

⑤　カトリック関口教会の模造ルルド（明治44年築造）

レゼ神父の著書『ルゝドの洞窟』の中で、築造されるに至った経緯や築造された模造体のオリジナルとの類似性が詳細に語られていた東京の関口教会（現カトリック東京大司教区司教座聖堂）の模造ルルド（図12）は、同書の出版年と同じ明治44（1911）年に、パリ外国宣教会司祭で関口孤児院の所長を務めていたH. A. W. ドマンジェル（Henri Anatole Wilhelm Demangelle, 1868-1929）神父の指導で築造されたものである。それに先立つ明治41（1908）年２月11日は、ルルドにおける聖母出現の五十周年記念日に当たっていたため、関口教会では「ルルド聖母出現五十年記念祭」が催され、これを契機として日本の東京教区に模造ルルドを造ろうという機運が高まり、実現に至ったという。そして明治43（1910）年２月11日に起工式が行われ、竣工後の明治44年５月11日には祝別式が挙行されている。

パリ外国宣教会の年次報告は、この模造ルルドについては、レゼ神父の報告であるとして、「無原罪の御やどりの名称のもとに祝された関口の教会は、はじめから天の元后の母としての御保護のもとにおかれていた。孤児院の院長、ドマンジェル師の熱心のおかけで、この教会は以後、また特別に聖母に奉献された。というのは、ルルドの聖母のすばらしい洞窟を所有する栄誉を受け、こうして巡礼の地となったからである。」[37]と、ごく簡略なレポートを掲げているにすぎない。

しかし、明治24（1891）年に創刊された長い歴史をもつカトリック逐次刊行物『聲』[38]の427号（1911ａ年）には、関口教会で執り行われた模造ルルドの聖別式の様子が詳細に報告されている。同報告に拠れば、この洞窟模型は、「…此靈塲に出現し給いし聖母マリアは當時ベルナデツトに向ひて、多くの人々の此處に來ることを望むと仰せられたる由なるが、…略…人の世は何事も意の如くなるものに非ず、或は路の遠きが為めに、或は餘暇の無きが為めに、その他種々なる支障のありて、身親しく此靈塲に詣たらんことを極めて難きことなりとす。されば責めてはその摸造にても作り、其處に詣でゝルゝドに到れる如き心もて祈り、同一の恩惠を被むらんものと、世界各國の公教信從は其の所在地の近傍にルゝドの模造をつくること行はれ、其塲に於て大なる奇蹟の現はれたることも亦稀ならざるに至れり。然るに吾邦には猶其の模造も至つて尠く、殊に首都たる東京に未だ一個所も之あらざるを遺憾とし」[39]て、市内小石川区関口台町の天主堂の裏手になる広場に苦心の末に築造されたものであった。

同報告はさらに、この洞窟模型の形状を以下のように記しているが、それはレゼの記述とほぼ同じ内容になっている。「此洞窟の形狀は彼ルゝドなるマツサビエルの洞窟と全く同一の寸法に造られたるものにて、之が參考のため態々ルゝド聖堂の主任

司祭に依頼し、其の寫眞、圖畫、模型までも取寄せ知名の技師をして、設計及び工事の監督に膺らしめ、幾多の辛苦を經て今回始めて其の竣工を見るに至れること、前に已に記せるが如し。此洞窟の大さは基底より天井まで最も高き所二丈三尺、入口より奥まで深さ三丈九尺、間口は三丈七尺ありて、洞窟の内部天井より四壁の高低凸凹その他虧隙等の細密なる所まで全くルゝドの原形を其儘に摸れるものなりといふ。」(40)

さらにレゼの著作と同年の明治44年に刊行された若月紫蘭の『東京年中行事』中でも、「…略…、ルゝドの洞窟の模造は到る處に造らるゝことゝなり、肥前の五島の中玉村、備後の福山、名古屋などにもそれが出來た。けれども全くルゝドの洞窟と同一型に出たものはないと云ふので今度小石川區關口臺町十九番なる玫瑰塾の後庭の廣場に、全然ルゝドのそれに型どつた同形同大の純粋の模造が築かるゝこととなり、今年それが竣成を告げて五月の二十一日と云ふに其聖別式と云ふのが行はれた。思ふに此目白臺に於けるルゝドの洞窟と云ふものも今後或方面に於ける名物となることで有らう。…略…」(41)と紹介されている。

以上のように、関口教会の模造ルルドは、複数の著書や雑誌で建設当初から紹介されており、その後戦災などによってしばらく荒廃していた時期はあったものの、教会敷地内の復興整備が進むと同時に修復されて、若月紫蘭が言うように目白台のひとつの名物となって現在に至っている。なお、ここでも置かれているのは聖母像のみであり、彼女を見上げて祈るベルナデット像は置かれていない。

⑥　当別トラピスト修道院の模造ルルド（明治44年築造）

トラピスト修道院は明治29（1896）年に創設され、函館教区の初代司教ベルリオーズと中国の慰めの聖母修道院の大修道院長 D. ベルナール・ファーヴル（Dom Bernard Favre）の合意の下、「灯台の聖母修道院」と命名された修道院である。そして翌明治30（1897）年には、フランスのノルマンディー地方にあるブリックベック修道院の副院長 D. ジェラール・プーリエ（Dom Gerard Peuiller, 1897-1926在任）が創立修道院長として当別に着任するに至った。当別修道院の現在の広大な敷地は、当時は「石倉野」と言われたほど石ころが多く、熊笹の生い茂る荒涼たる原野であったが、渡来した修道士たちは徐々に入会者を得て、苦労してこの原野を開墾し、道を作ったり、丘を平らにしたり、谷をうずめたりしながら畑に変え、今日の姿にしていったという。

このような土地に模造ルルド（図13）が設置されたのは、以下のような経緯によるものであった。上述の初代修道院長プーリエはかねてより帰化を申請しており、明治34（1901）年に正式に許可されて岡田普理衛と名乗ったが、火災等による建物の焼失やその後の修道院本館定礎といった種々の困難を経た後の明治43（1910）年の春先、彼はまたしても雪の深い裏山で遭難するという不幸に見舞われた。しかし彼は、函館の病院に入院して幸いにも一命をとりとめることができ、その感謝のためにか、入院中に自身が遭難した裏山に模造ルルドを築

造する計画を立てたのであった。この計画は、彼の退院後、修道院の関係者全員の賛同を得て夏頃から実現に向けて動き出すに至り、翌明治44（1911）年５月11日にはパリ外国宣教会のベルリオーズ司教によって落成祝別式が執り行われた。ちなみにマリア像（図14）は、主税町教会に模造ルルドを造った東京教区名古屋地区のフェラン師[42]から贈られたものであった。同宣教会の年次報告には、函館の灯台の聖母修道院で明治44（1911）年にルルドの聖母の大きな洞窟の落成式が行われたことが簡略に記されている[43]。

なお、明治44年の設置以来親しまれていたこの初代の模造ルルドは、風化落石のため危険となり、修復も不可能とわかったため、平成元（1989）年に200メートルほど手前の山を削って新しい模造ルルドが築造された。そして現在はこの２代目の模造ルルドが信徒の崇敬を集めている。同修道院の模造ルルドには、初代の模型にも２代目の模型にも、最初期の他の模造ルルド群と同様、聖母マリア像のみが設置されているだけで、ベルナデット像は置かれていない。

結　語

以上の概観、考察を通して、日本におけるキリスト教の再布教の初期においてはパリ外国宣教会士が専ら宣教に当たり、宣教に際しては、信徒の聖母マリアに対する信心を煽るために、19世紀の「聖母の出現群」、とりわけルルドにおけるご出現が同会士らによって巧みに利用されていたと結論づけられるように思われる。神父たちが母国から携行してきて信徒に分配したと推測されるメダイ群にルルドやラ・サレットにおけるご出現を陽刻したメダイが存在することや、明治期のルルドに関係する著作群もパリ外国宣教会士が執筆していること、また同会の年次報告中にルルドの聖母を献堂対象とした教会の建造に関する報告や同聖母に対する崇敬を表す言葉が頻出することなどは、そのことを裏書きしていよう。

ルルドの聖母に対するこのような崇敬の高まりの中で、明治期の日本にパリ外国宣教会士によって当時の４教区、すなわち長崎、大阪、東京、函館教区のそれぞれに模造ルルドが築造されるに至ったのは、従って至極当然であったと言えよう。そしてその外観は、初代の外観が不詳であるものを除き、聖母ご出現の場所に見立てた小窟と、奇跡を齎す聖水が湧く大窟の２つの洞窟を設け、マリア像のみを小窟に設置していたと結論づけられる。つまり、後代の模造ルルドの多くに、オリジナルにはない聖母を仰ぎ見ながら祈りを捧げるベルナデット像が設置されていることを考えれば、明治期の模造ルルド群ではオリジナルにできるだけ忠実であることが意図されていたと言える。なお、マリア像自体は直接フランスから取り寄せるか、主税町、浜松、函館の３教会の模造ルルドにおいてフェラン神父がその手配に関与していたように、少なくともパリ外国宣教会士が関わってそれを準備したと考えられる。

［凡例］

・外国人の人名やキリスト教の専門用語等の

表記については、新カトリック大事典編纂委員会編『新カトリック大事典』Ⅰ－Ⅳ　研究社　2009年に依拠したが、原文を引用する場合は原文のままとした。

・引用文中の省略（…略…）は稿者による。

［註］

⑴　１章１節は、主に M. コーナン「パリ外国宣教会」『新カトリック大辞典Ⅳ』研究社　2009年　81～83頁；太田淑子編『日本、キリスト教との邂逅　二つの時代に見る受容と葛藤』オリエンス宗教研究所　2004年　172-202頁を参照。

⑵　池田敏雄『人物中心の日本カトリック史』サンパウロ　1998年　124頁；中島昭子「フォルカード神父とカトリックの日本再布教」『キリシタン史の新発見』岸野・村井編　雄山閣出版　1996年　102頁

⑶　1854年12月８日にピウス９世が発布した大勅書（Ineffabilis Deus）のうち、「聖母の無原罪の受胎についての決定」がこれに当たる。同決定は、「…略…人類の救い主キリスト・イエズスの功績を考慮して、処女マリアは、全能の神の特別な恩恵と特典によって、その懐胎の最初の瞬間において、現在のすべての汚れから、前もって保護されていた。この教義は神から啓示されたものであるので、これをすべての信者は常に固く信じなければならない。」としている（D. シェーンメッツァー『カトリック教会文書資料集』A. ジンマーマン監修　浜　寛五郎訳　エンデルレ書店　平成14年（改訂５版１刷）429頁）。

⑷　関　一敏「聖母出現をめぐる一考察－ルルドの出来事（1858）」『筑波大学　地域研究Ⅰ』1983年　133頁

⑸　若月伸一『ヨーロッパ聖母マリアの旅』東京書籍　2004年　162-163頁

⑹　ベルナデットへの聖母のご出現については、拙稿「聖母マリアの巡礼地ルルドと天草の模造ルルド群」『崇城大学芸術学部研究紀要』第６号　2012年　74-75頁を参照されたい。

⑺　江口正一「東京国立博物館保管の「キリシタン関係遺品」について」『東京国立博物館図版目録　キリシタン関係遺品篇』（初版）東京美術　昭和47年　３頁は、「出所来歴が記されていないもの」について言及していないが、増補改訂版（『東京国立博物館図版目録　キリシタン関係遺品篇』東京国立博物館　2001年）の13頁と20頁註１は、出所不明記の関係遺品が相当数存在するとしている。

⑻　江口「前掲解説」（初版）16頁

⑼　F. マルナス著　久野桂一郎訳『日本キリスト教復活史』みすず書房　1985年

⑽　『同上』256頁

⑾　『同上』260頁

⑿　『同上』266-267頁

⒀　『同上』277頁

⒁　『同上』281-282頁

⒂　拙稿「前掲研究報告」75頁参照

⒃　ヘンリ・ラッセル著　水主増吉重訳『留ゝ登゛の姫君』天主公教会　明治25年　393-412頁

⒄　『同上』452-458頁

⒅　ドルワール・ド・レゼー『ルゝドの洞窟』林壽太郎　和佛協会印刷部　明治44年。原本は札幌大学が所蔵しているが、稿者は国立国会図書館提供のデジタル化資料に

よって内容を閲覧した。ちなみに同書では、著者はドルアール・ド・レゼではなく、「ドルワール・ド・レゼー」と表記されている。

⑲ 『同上』60-61頁

⑳ 『同上』62頁に「玉村」とあるが、「玉の浦」のことであることは疑いない。

㉑ デーシアン著　林壽太郎訳『不思議』林壽太郎　和佛協会印刷部　1911年（第３版）。唯一、南山大学に所蔵が確認される。

㉒ 原本の閲覧はできなかったが、牧野多完子「明治期におけるカトリック出版事業－教学研鑽和佛協会の活動を通して－」『南山大学図書館紀要』第７号　2001年　61頁によれば、本文に記した内容が確認される。

㉓ 小崎登明『西九州キリシタンの旅』聖母の騎士社　2009年（第８刷）80-83頁

㉔ 『同上』83頁

㉕ 井持浦小教区『井持浦ルルド創設100周年記念誌　1899年-1999年』聖母の騎士社　2000年　52頁、178頁年表中では、クーザン司教による祝別式の挙行は明治33（1900）年とされているが、本稿では他の多くの資料に依拠し、明治32年とした。

㉖ パリ外国宣教会『パリ外国宣教会年次報告Ⅱ　1894-1901』松村菅和・女子カルメル修道会訳　聖母の騎士社　1998年　205-206頁

㉗ 『同上』235頁

㉘ 中田武次郎『キリシタンのルーツ－最後の殉教者とその一族－』日本図書刊行会　1994年　210-212頁は、開腹手術ができないほど腹膜炎が悪化した五島の主婦が、井持浦まで舟で運ばれ、同地でルルドの霊水を入れた風呂に入って全快した例を紹介している。

㉙ カトリック福山教会への照会によって現存していないことを確認した。

㉚ パリ外国宣教会『パリ外国宣教会年次報告Ⅲ 1902-1911』松村菅和・女子カルメル修道会訳　聖母の騎士社　1998年　190-191頁では「ローランド師」とされている。福山の山野村には明治33年に廃止となったルルドの聖母に献堂された山野教会も存在していた。

㉛ 『同上』208-209頁

㉜ 『松岡司教の司祭叙階五十年記念　素顔の名古屋教区』五味巌、他編　松岡司教の司祭叙階五十年「記念事業会」発行　昭和43年　30頁では、老婆は「加藤りん」ではなく、「山本リオ」とされており、彼女はリューマチが進んで重態にあったという。

㉝ 『同上』30頁

㉞ 『パリ外国宣教会年次報告Ⅲ　前掲書』233頁

㉟ 『素顔の名古屋教区　前掲書』47頁

㊱ 以上の記述はカトリック浜松教会への聞き取り調査に基づく。

㊲ 『パリ外国宣教会年次報告Ⅲ　前掲書』260頁

㊳ 『聲』はカトリック逐次刊行物の代表的存在。明治24（1891）年に京都の木鐸社より創刊され、明治32（1899）年にはその発行所を東京の三才社に移した。この時中心的役割を果たしたのはパリ外国宣教会司祭のC. ルモアヌ（Clément Lemoine）師。さらに明治44（1911）年には F. ボンヌ（François Bonne）東京大司教の命によって東京、長崎、大阪、函館の４教区公認の機関誌となった。その後、財政上の行き詰まりによって三才社が閉鎖されると、発行は M. A. ステイ

シェン（Michael A. Steichen）師創立の教友社に移されたが、昭和４（1929）年にカトリック中央出版部が創設されると、委員に加わったルモアヌ師が再び編集主幹となった。

(39) 「ルルド洞窟の聖別式」『聲』427号　三才社　1911ａ 42頁

(40) 「同上」44-45頁

(41) 若月紫蘭『東京年中行事』下巻　春陽堂　1911年　409頁

(42) 『当別トラピスト修道院　百周年記念』灯台の聖母トラピスト修道院　1996年　６頁では、マリア像は明治44年に「ミッション会東京教区のフェーラン師より寄贈」とされているが、名古屋地区は当時東京教区に属していたので、この「フェーラン師」は、明治42年に名古屋地区の主税町教会に模造ルルドを建立したフェラン神父（主税町教会在任：1907-11）と考えられる。フェラン神父は、栃木県足利市に聖堂を建立する使命（『素顔の名古屋教区　前掲書』30頁による）を帯びて明治44年12月に去るまで名古屋地区にいた。

(43) 『パリ外国宣教会年次報告Ⅲ　前掲書』277頁

［その他の参考文献］（註に挙げた文献を除く、発行・発表年順）

＜単行書＞

・矢崎美盛『アヴェマリアーマリアの美術－』岩波書店　1953年初版　2000年第７刷

・『主税町教会　明治－大正－昭和　あゆみ』カトリック名古屋教区主税町教会建設委員会　1985（昭和60）年

・畔柳武司「136．カトリック主税町教会」『愛知県の近代化遺産』愛知県教育委員会　2005年　267頁

＜論文・研究報告・その他＞

・関　一敏「19世紀フランス聖母出現考－ルルドとポンマン－」『民俗学研究』48/3　1983年　251-274頁

・長沢利明「日本のルルド」『西郊民俗』212　2010年　1-13頁

・“TOBETSU TRAPPIST MONASTERY Centenarian History（1896-1996）”（http://www.trappist.or.jp/home/Tobetsu-History/OurHistory.html）

［図版出典］

図１、２、４：Image: TNM Image Archives

図３：TNM ImageArchives Source: http://TnmArchives.jp/

図５～８、10～12：稿者撮影

図９：『素顔の名古屋教区』五味巌、他編　松岡司教の司祭叙階五十年「記念事業会」発行　昭和43年　30頁

図13：『当別トラピスト修道院　百周年記念』灯台の聖母トラピスト修道院　1996年　6頁

図14：東北芸術工科大学東北文化研究センター提供

［謝辞］（敬称略、五十音順）

本稿執筆に当たっては以下の諸氏にご教示やご協力、資料や画像の閲覧許可やご提供等を頂いた。記して衷心よりお礼申し上げる次第である。

カトリック井持浦教会（野濱達也旧司祭）、カトリック関口教会、カトリック主税町教会（石黒眞智子、竹山英明御夫妻）、カトリック長崎大司教館図書室（長野宏樹）、カトリック浜松教会、カトリック福江教会、カトリック福山教会事務局（藤田邦寿（故人）、藤井正晴）、

（株）ＤＮＰアートコミュニケーションズ（石井敬子）、東北芸術工科大学東北文化研究センター（鈴木明里）、当別トラピスト修道院事務局（宮本克司修道士）

図１　メダイ（C938）　1830年　ヨーロッパ製
真鍮製
表：無原罪の聖母（不思議のメダイの聖母）像　裏：モノグラム、心臓、星
刻銘：（表）O MARIE CONCUE SANS PECHE PRIEZ POUR NOUS / QUI A VONS RECOURS A VOUS / 1830
東京国立博物館保管
Image: TNM Image Archives

図２　メダイ（C935）　19世紀　ヨーロッパ製
真鍮製
表：ラ・サレットの和解の聖母像
裏：同聖堂
刻銘：（表）N.D.RECONCILIATRICE DE LA SALETTE P. P. N.（裏）SANCTI A□ N. D. DE LA SALETTE
東京国立博物館保管
Image: TNM Image Archives

図３　メダイ（C937）　19世紀　ヨーロッパ製
真鍮製
表：ラ・サレットの和解の聖母像
裏：文字
刻銘：（表）N. D. DE LA SALETTE P. P. N.（裏）APPARITION / DE LA S.VIERGE / A LA SALETTE / PALAVAUX, CANTON / DE CORPS,/ LE 19 / 1846）
東京国立博物館保管
Image: TNM Image Archives

図４　メダイ（C953）　19世紀　ヨーロッパ製
真鍮製
表・裏：ルルドの聖母像
刻銘：（表）JE SUIS IMMACULEE CONCEPTION（裏）NOTRE DAME DE LOURDES PRIEZ POUR NOUS
東京国立博物館保管
Image: TNM Image Archives

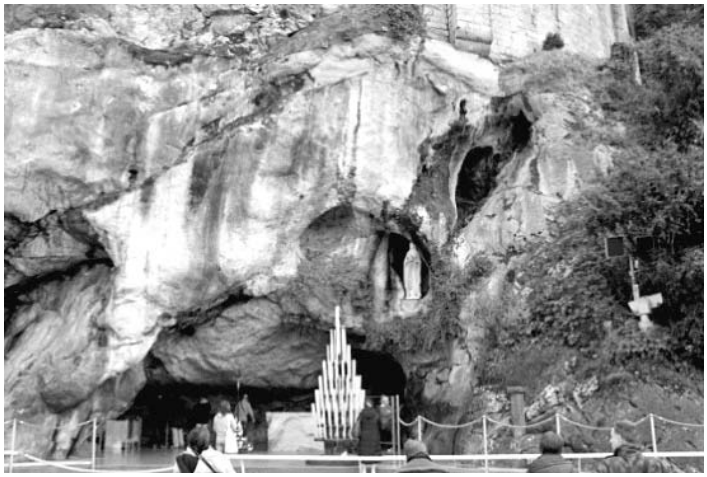
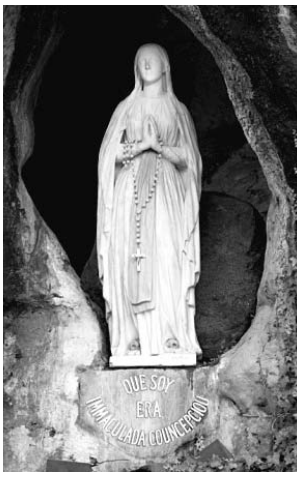



図５　フランス　ルルドのマッサビエルの洞窟（左）とジョセフ・ファビッシュ制作（1864年）の聖母マリア像（右）

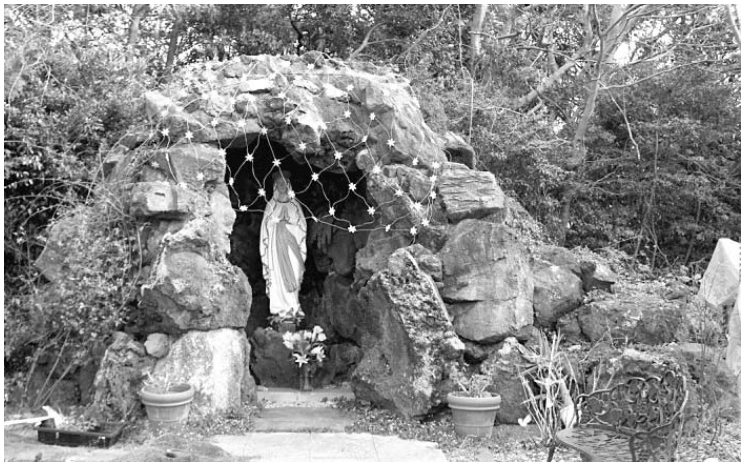
図６　下五島　現在のカトリック井持浦教会

図７　下五島　カトリック井持浦教会の日本で最初に建造された模造ルルド（左）と聖母マリア像　洞窟：明治32（1899）年築造

図８　名古屋　現在のカトリック主税町教会の聖堂

図９　明治42（1909）年に祝別された当時の主税町教会の模造ルルド　中央が築造者のC. P. フェラン神父

図10　現在のカトリック主税町教会の模造ルルド（左）と聖母マリア像（右）
洞窟：明治42（1909）年築造



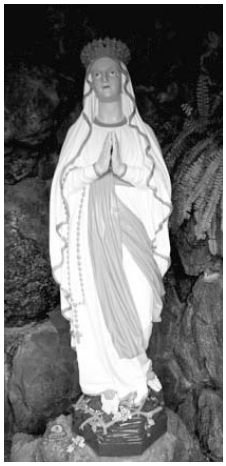


図11　浜松　再築造された現在のカトリック浜松教会の模造ルルド（左）と聖母マリア像（右）
洞窟：平成元年頃再築造　聖母像：初代の模造ルルド建造当時（明治42年）に主税町教会主任司祭のフェラン神父から贈られたと伝えられる御像

図12　東京　カトリック関口教会（東京大司教区司教座聖堂）の模造ルルドと聖母マリア像　明治44（1911）年築造

図13　北海道　当別トラピスト修道院の模造ルルド　明治44（1911）年祝別

図14　当別トラピスト修道院の模造ルルドと聖母マリア像　明治44（1911）年祝別（画像は東北芸術工科大学東北文化研究センター所蔵）